

## 閉ざされた記憶

初夏だというのに、その日も暑く、午前中から気温は三十度を超えていた。だが、山の中のこの家はそれほど暑さを感じない。木々が多いせいか、家の中までいい風が吹き込んでくる。

古びたこの家も修復を加えれば、息を吹き返してくる。榎本悠一は物置

えのもとゆういち

の修復に取り掛かっていた。古くなった木材を取り外し、ホームセンターで購入してきた新しい部材を加工して、そこに嵌めこむ。

取り外してみると見事にシロアリに食われて、スカスカの状態になって

いた。よく今まで崩れずに持ち堪<sup>こた</sup>えていたものだと思う。

そこに防腐剤を塗った新しい木材を取り付けた。みずばらしくなっていたその部分も新調すれば、美しく生まれ変わるのだ。

古い部材を取り除いては、新しいものに据え変える。その繰り返しだった。もう一年近くそんな生活をしていた。

悠一の中では完成はなかった。その段階でも完成だと思えば完成だし、まだ直したいところがあれば直す。そんな感じでその家の修復作業は行われていた。

それでもリビングやキッチン、風呂場などの主要な部分はDIYを行っていた。でなければ生活できない状態だったのだ。それらの修復はすでに終えている。生活するには十分すぎるほどにいい出来栄であった。

本当はそこで終わってもよかったのだが、気にし出すと止まらない性格の彼は、至るところが気になり、ホームセンターで材料を買ってきては修復作業をするという毎日だった。

彼は元々DIYが好きなのだ。この家は趣味と実益を兼ねていた。自分の作業している動画を撮ってはユーチューブで配信している。転んでもただでは起きないというやつだ。

チャンネル登録者数もどんどん増えて、もうすぐ十万人に達するというところまで来ていた。その甲斐あって今はそちらの収入で生活をしている。以前勤めていた会社は退職してしまった。

部長職まで上り詰めていたが、それをあっさりと投げ捨てて、今の生活を選んだのだった。最初は不安もあったが、思い切って飛び込んでしまえば、なんとかなった。食うには困らない。貯金も一千万ほどあったので、

それで食いつないだ。

もうスーツの世界とはお別れして、今はTシャツに作業ズボンという毎日だった。それが制服みたいなものだ。

この家は元々彼の家ではなく、両親が住んでいた家だった。田舎暮らしに憧れて父が購入したものだ。母は田舎への移住には反対していたのだが、父は頑として譲らず、自分で決めて家を買ひ、強引に移り住んでしまったのだ。母は渋々という感じでついてきた。

その父はこの家に住み始めて一年後に脳卒中で他界してしまった。遺された母も一人で住んでいたのだが、去年の暮れに亡くなった。

兄弟で集まり、葬儀後に話をして、この家は悠一が引き継ぐことになった。そうすれば彼自身も家賃がかからないし、田舎暮らしなら生活は楽だと思ったのだ。

